

申命記 8章 1-10 節

エフェソの信徒への手紙 4章 30 節-5章 2 節

ヨハネによる福音書 6章 37-51 節

夏真っ盛りの時期となりました。礼拝堂も執務室も事務室も、空調がないととても暑くなります。ただし、一階ホールの入り口付近は、よく風が通り、自然の涼しさを感じます。貴重な空間です。熱中症にも気を付けつつ、残暑と呼ばれる頃には、公禱の礼拝で皆様とお会いできればと思います。オリンピックも本日閉会式ということです。もし国内で外出しないでオリンピックを見ている人が多かったのであれば、オリンピックは間接的に感染防止に役立ったといえるかもしれません。パラリンピックも同じようにたくさんの方が注目すれば、同じでといえるでしょう。

本日の旧約日課は、「申命記」ですが、マナ・パンについての記述がある点が共通しています。特に 8章 3 節の「**主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることあなたに知らせるためであった**」は、「マタイによる福音書」にある荒野の誘惑のイエス様の言葉として有名です。しかし、この箇所が本来的に意味している内容は、なぜ主なる神様はイスラエルを選び、出エジプトの出来事を通して導かれたのかということです。それは、イスラエルが、主なる神様の意志を理解し従う人々として、人間の模範となるためです。先週触れました通り、天からのパン・マナは、単なる補給物資ではありません。マナは、主なる神様が、イスラエルを生かし、導くことの象徴です。それゆえに、実体としてのパンが重要なのではなく、主なる神様の言葉が重要なのです。見方を変えれば、パンは、人間の思い、願望、実際の生活、この世の命など、人間側の事柄の象徴です。人間がそのような事柄中心に生きないようにすること、そのことを示すためにイスラエルの選びがあります。そして、そのイスラエルの選び自体も、出エジプトの出来事を通して試されるのです。これらが冒頭の「**今日、わたしが命じる戒めをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたたちは命を得、その数は増え、主が先祖に誓われた土地に入って、それを取ることができる**」(申 8:1) という言葉に含まれています。

このイスラエルについて出エジプトの出来事からの歴史を見ますと、王国としてのまとまりがない時期の方が、圧倒的に長いことがわかります。現代は、イスラエルという国家がありますので、少し理解が複雑になりますが、イスラエル、あるいはユダヤ人は、主なる神様から与えられたこの使命を、いまでも実行中といえます。また本日の最後「**あなたは食べて満足し、良い土地を与えてくださったことを思って、あなたの神、主をたたえなさい**」(申 8:10) とありますので、出エジプトの出来事の際に得た場所でないと、模範としての行動が実行で

きないのかどうかも課題です。しかし、『聖書』は、イスラエルを題材として、人間という存在は、パンを食べて満足してしまった時、主なる神様を忘れてしまうことがある、あるいはそのことだけで主なる神様に感謝してしまう、そういう点があると語っていると思います。言うならば、イスラエル・ユダヤ人を見れば、様々な意味で模範として、主なる神様が何を意図しているかが示される、そう語っているのです。イスラエルが契約の民とよばれる所以です。

わたしたちにとっても、このイスラエルの存在理由は大切です。そして、そのまま「教会」あるいは「キリスト者」と置き換えても同じです。ただし、もっとも大切なことは、わたしたちと主なる神様の間に立ってくださる方が、モーセなどではなく、主イエス・キリストであるということです。そして、このイエス様への信仰を通して、この地上の命がすべてではないことを示すことが、わたしたちの使命です。本日の福音書で、そのイエス様が、自らを「命のパン」とであると語り、そのことをより明確にしています。

本日の福音書は、先週の続き「ヨハネによる福音書」です。8月の聖書日課の福音書は、ヨハネ福音書の8章24節から66節にある命のパンに関する物語が四つの主日にわたって分解してあります。本日の箇所は、二つ目の部分です。

この「ヨハネによる福音書」にはいくつか特徴がありますが、その一つに、物語の中で、登場人物たちの話がかみ合わないということがあります。理由は、一つの言葉の意味が、各登場人物間で異なっているまま話が進むからです。前回の個所でも本日の個所でも、「パン」という言葉がそれにあたります。もう一つは、登場人物たちが、物事を正しく認識し判断しているのですが、その認識や判断が、正しいと同時に間違っており、その矛盾を持ったまま話が進むからです。本日の個所でいえば、イエス様が「**天から下って来た**」というところがそれにあたります。

これらの特徴は、福音書を初めて読む人に誤解を招く可能性があります、イエス様を信じ、またよく知っている人にとっては、まったくおかしい点はありません。むしろ、イエス様が誰であるかを、何度も確認できる福音書になっています。「ヨハネによる福音書」が、全体を通して信仰的な慰めを与えていると言われるのは、これらのことが理由です。

さて、本日の「**父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない**」から始まる、37節から40節は、逝去者記念聖餐式で毎回読まれる福音書です。この部分は、最後に「復活させる」とはっきりと語っているので、逝去者記念式にはふさわしいと思います。ただし、初めて聞いた人は、「追い出す、追い出さない」という言葉に不快な思いをするかもしれません。「追い出されること」もあるのかと思ってしまうからです。しかし、ここでイエス様が語っていることは、イエス様を信じる人は、救いあるいは天国から決して追い出されることなく、むしろ、永遠の命を得るという確信です。そして、そのことが主なる神様の御心であるということ強調しているのです。もっと短い表現でいえば、イエス様を信じる人は、こ

の世においてその命が終わっても何の心配もないということです。

この信仰を、物語の中のユダヤ人たちはもっていません。それが41節から示されます。「イエスが『わたしは天から降って来たパンである』と言われたので、イエスのことをつぶやき始め」るからです。つぶやくというのは、不平を言うという意味もありますが、彼らは、「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか」と語ります（ヨハネ6:42）。

先週の説教では、荒野に入ったイスラエルの人々が、モーセを通して主なる神様に対して、不平を言うという箇所から、わたしたちも堂々と不平を言おうというようなお話をいたしました。「旧約聖書」はヘブライ語であり、「新約聖書」はギリシア語ですが、「旧約聖書」のギリシア語訳で、先週の不平を言うという部分と、ここでの「つぶやく」という言葉は、同じ語根の言葉が用いられています。日本語の響きにそのまま訳せば、「ぶつぶつ言う」という訳がもっとも元来の意味を伝えています。

ここでイエス様は、「つぶやき合うのはやめなさい」と語っておられます（ヨハネ6:43）。ユダヤ人たちは、主なる神様あるいはイエス様に不平を言うのではなく、今イエス様が語られたこと、また今起きている出来事に疑問に思ったからです。ただし、彼らは、正しい知識から疑問に感じています。「ヨセフの息子」と知っているからです。つまり、イエス様は、この地上のごく普通の場所に生まれて、父親も分かっている。それなのになぜ「天から」などというのかと疑問に思ったのです。イエス様がメシア・キリストである、しかも従来のユダヤ教的な意味とは異なるメシア・キリストである、と知っているわたしたちにとっては、疑問に思うことではないのですが、ユダヤ人たちは、まず天から下って来たというところから疑問に思ったのです。しかし、いつの時代でも、イエス様を単なる人間だと思えば、天から下って来たという表現は疑問に思うかもしれません。

イエス様は、ユダヤ人たちに「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる」（ヨハネ6:44）と述べます。それは、イエス様とは、地上に生まれながらも、天から来た方であり、そのイエス様ご自身が「命のパン」であるからこそ、イエス様を信じるとき、そこに永遠の命・復活の命があるということを示しているのですが、聞いたユダヤ人たちにとって、その内容は理解不能でした。「天から来た」「パン」「命」どれをとっても、彼らの知っている意味と、イエス様の語る意味が異なっているからです。このことは現代でも同じです。イエス様を単なる人間であると理解している人、あるいは自分の理性的判断の範囲内で理解しようとしている人は、イエス様に救いがあることは分からないのです。

さて、この「ヨハネによる福音書」も歴史的な文献ですので、時代を反映した特徴があります。その特徴が登場するユダヤ人の描写にも表れています。それ

は、ユダヤ人が、他の福音書と異なり、かなり抽象化された存在として描かれているということです。それは、言い換えれば、ユダヤ人は、人間的に物事としっかりと理解し、主なる神様に対する信仰も持っている。しかし、イエス様を理解していない、そのことを強調して描かれているということです。

ただし、「ヨハネによる福音書」にあるユダヤ人の描き方を、ユダヤ教の信仰と教会の信仰とどちらが正しいのか、というような問いにつなげることは、正しい認識ではありません。両者とも、主なる神様が人間を救いへと導こうとする、今も有効な道に他ならないからです。大切なことは、ユダヤ教と教会の信仰の両方に言えることですが、自分たち以外に救いはない、それ以外は滅ぶ、あるいは滅んでも仕方がない、そのように考えることは、主なる神様の意志ではないということです。なぜならば、イスラエルも教会も、模範となるべき存在に他ならないからです。

本日は、8月8日です。先週は、8月6日（金）主イエス変容の日に、祝日の聖餐式を行いました。8月6日と明日の9日は、教会の暦とは別に日本にとって大切な日です。なぜ、原子爆弾のような兵器が使えたのか、そのことを過去のこととして考えることは大切ですが、残念ながら、今も、核兵器は有効な兵器として残っています。いまでもそれを新たに保持したいという国々もあります。同時に21世紀にはいり、戦争の形も変わりました。火薬がさく裂して人を傷つける今までの通りの戦争もありますが、電子パルス兵器や無人の自立型攻撃ドローンなど、人を傷つけないで無力化する兵器があるかと思えば、機械だけが独自に判断して人を傷つける兵器も登場しています。

理性は大切です。その理性でしっかりと世界を判断し、何かを実行しようとすることは大切です。しかし、それだけで見ていると正しいことであるが、間違っているということが起きます。だからこそ、主なる神様への信仰が大切なのです。人間にはどう考えてもこれしかないと思っても、主なる神様の視点から見れば、全く違う正しい道がある。教会に集められるわたしたちは、そのことに気づくことが大切です。今も変わらない教会の使命、あるいは教会の平和の実現の仕方はそこにあります。なぜならば、わたしたちが信じるイエス様は、この地上の命がすべてではなく、死後の永遠の命を約束して下さっているからです。永遠の命がある。そこから見た時、人間を超えた答えがある。そしてその先に平和がある。そのことを改めて今日の個所から学びたいと思います。

最後に、本日の使徒書、「**あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい**」とあります（エフェ5:2）。直接的な意味は、「愛された子どもとして、神様のまねをきなさい」ということです。わたしたちの教会が、世界を平和にすこしでも導く存在となるように、まずわたしたち自身が、主なる神様に愛されていることを深く心に刻みたいと思います。「神様のまね」など人間には不可能ですが、その愛を礼拝で示すことはできると思います。それもまだできませんが、熱中症に気を付けつつ、礼拝堂で再開することを待望し、ご一緒に祈り続けたいと思います。